

原発・いのち・みらい
シリーズ
エッセー その3

福島の実家が被災して

住民本位の復興を

事務局 小野 栄子

私の故郷は福島県伊達市です。福島第一原発から西へおよそ六十キロメートル程離れたのですが、放射線量の高いホットスポットが生じ、市の一部が避難勧奨地点に設定されました。

高村智恵子が「ほんとの空」と評した、青く澄んだ空。ピンク色に染まった桃畑を爽やかな風が吹き抜ける。菜の花やたんぼが咲き乱れ、草が青々と生い茂る五月の福島。今年、GWに帰省した際は、そんな光景を見るたびに胸が痛みました。

3.11以降の福島

三月十一日以降、福島でもライフラインの断絶がありました。テレビ・ラジオもつながらないなかで、原発事故が起きた地域に住み続けることの不安は、私の想像を超えるものでした。原発から六十キロも離れた伊達市でさえ、事故発生当時の放射線量は通常の四百倍。そういう状況で、これから何が起ころうとしているのか、今何をなすべきかについて、まったくの無知でした。



5月、青々と茂る春草の上にタンポポが咲き乱れ、桃畑と青空が広がり、まるで桃源郷のような福島



桃の収穫を終え、晩夏のころになると梨の収穫に入る。現在、稲以外は作付制限が行われておらず、収穫後に放射能検査が行われ、出荷の可否が判断される

「平時」の生活保障の確立

この間、「できるだけ早く、遠くへ逃げたほうが良い」というアドバイスももらいましたが、結局私は家族や友人たちに伝えることができませんでした。なぜなら、避難したくても避難できない理由があったからです。避難することは生活の糧を失うことに等しく、金も収入もありません。生活保

分なタクシー代がなければ避難もできない。親戚はみな被災地に住んでいるため避難先がない。さらに過酷な状況にあったのは、認知症高齢者や障害のある人でした。避難所にすら行けない、食料も届かない中、人が消えた街に取り残された。

原爆・核兵器の被害者をふたたびつくりたくないために証言と映像が一体になった迫真のパネル

製作：日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）

「原爆と人間展」

日時 2011年8月4日(木)~17日(水)
10:00~20:00
※最終日(17日)は16時までです。

会場 石川県庁19階 展望台ロビー

主催 反核・平和おりづる市民のつどい実行委員会 (石川県生協連内 076-264-0550)

行政・経済本位ではなく、住民本位の復興へ

護が打ち切られた例もありました。また、二十キロ圏内という同心円状の避難区域設定は、まさしく被爆者援護行政のあり方そのものでした。被爆者の声に耳を傾けていけば、同心円状に生じる被害ばかりではないことは容易にわかったはず。そして、内部被曝の問題を重視していたら、飯館村のように一カ月もの間、被曝させ続けることはなかったでしょう。

今、国の復興構想会議の中では農業や漁港の集約化が議論されていますが、これらが本当に復興をもたらすのでしょうか。企業を誘致して富をもたらすやり方は、原発を誘致した方法と同じです。事業の失敗や災害が起きた場合、企業はいち早く撤退します。結局犠牲になるのは、地域の住民です。石川県も能登半島地震からの復興途上ではありませんが、住民本位の復興を目指す

石川県保険医協会主催 緊急講演会
原発・いのち・みらい
(講演会シリーズ・第2回)

過去の原子力被災から 福島原発事故を考える
— 土壌調査からみる放射能汚染 —

講師 山本 政儀氏 金沢大学環日本海域環境研究センター・低レベル放射能実験施設 教授

とき 2011年7月28日(木) 午後7時~8時45分

対象 関心のある方ならどなたでも (定員50人)

ところ 石川県女性センター 4階コンベンション室 (金沢市三社町 1-44)

参加費 無料ですが申し込みが必要です

事前申込み必要 電話、E-mail、FAX でお申し込みください

詳しくは案内チラシをご覧ください

〈石川県保険医協会〉 金沢市尾張町 2-8-23 太陽生命金沢ビル 8階 電話 076(222)5373/FAX 076(231)5156
E-mail: ishikawa-hok@doc-net.or.jp

して取り組まれてきました。私たちがその経験を東日本の被災地につなぐ役割を担っています。また、今回の震災や原発事故からの教訓を、私たちのまちづ